

2019年1月13日(日)

主 題：「死んだ信仰とは」

テキスト：ヤコブの手紙 2章15-17節

はじめに

- ・前回、「ほんとうの信仰とは」と題して、メッセージをさせていただきました。主様は、「本当の信仰とは」、いったいどんなものかをお語りくださいましたが、それは私に語られた説教でありました。
- ・では、「ほんとうの信仰」と言うと、「ほんとうでない信仰」というものはあるか、という問いになりますね。ヤコブは、それを「死んだ信仰」と呼びました。そこで、今日の説教主題は「死んだ信仰とは」と、題しました。ヤコブはこう言いました。
- ・ **2:15 もし、兄弟また姉妹のだれかが、着る物がなく、また、毎日の食べ物にもこと欠いているようなときに、**
2:16 あなたがたのうちだれかが、その人たちに、「安心して行きなさい。暖かになり、十分に食べなさい。」と言っても、もしからだに必要な物を与えないなら、何の役に立つでしょう。
2:17 それと同じように、信仰も、もし行ないがなかったなら、それだけでは、死んだものです。
- ・皆さんは、この聖句をどのように受け止めるでしょうか？
 私はたいへん厳しく受け止めました。前回同様、私はこの聖句を読み、心がグサリと刺されました。
- ・皆さんは、いかがでしょうか。自分の「信仰」に、「行い」が伴っているだろうか、ということ。正直言って、その答えは、“No!”です。前回の聖句も、今日の聖句も、心静めて読んでいきますと、キリスト者である「資格の有無」を言っているのではないことがわかります。なぜなら、修辭的疑問文であるからです。つまり「No」という答えを想定した質問だということです。
- ・たしかに、誰一人、「Yes」と答えられる人はいません。信仰と行いが、一致する人はいないからです。ヤコブから言えば、「死んだ信仰」であります。
- ・2章15節から17節を要約すれば、次のようです。
 兄弟姉妹と呼ぶ関係で、着る物、食べる物が無い状況下（当時、エルサレムの教会は実に多くの貧困者がいた）で、困窮する人たちに「安心して行きなさい」と言って、何も援助や支援をしないことは「死んだ信仰」であるということです。「死んだ信仰」とは；
 ①「安心して行きなさい」とは、当時普通に使われていた別れの挨拶でした。マルコの福音書で、イエスは次のように言われました。
5:34 **そこで、イエスは彼女にこう言われた。「娘よ。あなたの信仰があなたを直し**

たのです。安心して帰りなさい。病気にかからず、すこやかでいなさい。」

つまり「安心して行きなさい」とは、別れの挨拶でした。

- ② 「暖かになり、十分に食べなさい」と言っても、実際何も与えませんから、苦境にある人たちは、寒くて空腹のまま去ることになります。それは「何の役にも立たない」、つまり「死んだ信仰」というものです。

- ・ポイントは、語る言葉と、その言葉の責任です。ここで大切なことは、人は神の中に生きる存在であることです。使徒の働き 17章

17:28 私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです。

私たちは神の中に、生き、動き、存在しているのですから、そのような「死んだ信仰」は、神を悲しませることになると教えています。

- ・しかし、私たちの信仰と行いが一致していないことも事実です。それでは、なぜ、ヤコブは実現不可能と思われる修辭的疑問をなげかけたのでしょうか。今日、私たちは信仰生活の現実に向き合いたいと思います。 2点

大切なポイント

1. 口だけの奉仕

1) リップ・サービス

- ・「リップ・サービス」とは、口だけの奉仕ということですね。自分を見る時、私にもそういうことがあることを反省させられます。
- ・たとえば、私たちは軽いタッチで「お祈りしています」と言ったり、手紙に書いたりします。もちろん、お祈りは「リップ・サービス」とは違います。しかし「お祈りしています」と言ったり、書いたりする時、心の中ではそう念じているのですから、ウソにはなりません。しかしながら、仮に私が言ったならば、(書いたならば)、そしてお祈りしないならば、軽い「リップ・サービス」(口だけの奉仕)となってしまうのです。ここが問題です。
- ・もし「リップ・サービス」が常習化するならば、実質のない「口だけの奉仕」となります。そして人は順に離れていくでしょう。神は心の奥深くまで見通しておられるお方です。神は「リップ・サービス」を見抜けない方ではありません。いかがでしょうか。私は神の前に正直に歩むべきことを教えられています。

2) 愛のサービス

- ・口だけのサービスでなく、大切なことがあります。それは愛のサービスです。

『例 話』

- ・昨年、私にとって大きな喜びであり感謝であったことは、聖日礼拝を都合によって講壇を休むことが、一度もなかったことです。一年間全聖日、私は神のみことばを説き明かす特権に与りました。一度も休むことなく、説教が許されたことは、決して当たり前のことではありません。これは主様に大変感謝しております。
- ・ある日曜日、朝から体調が優れない日がありました。体がとても重く、講壇に立てるかどうかわからず、そして神のみことばをとりつぐことができるかどうか、気持ちも重く不安にな

りました。

- ・ところが講壇に立つと、いつものように、上からの力に満たされて元気に説教できました。それは不思議な体験でした。皆さんがお祈りしてくださったからでした。
- ・小さな私のために、本当にお祈りくださっている方々を知っています。その兄弟姉妹の祈りは、決して「リップ・サービス」ではないと思います。本当にお祈りくださり、神様が祈りに応答くださったのです。ただ感謝であります。
- ・私たちは「リップ・サービス」という言葉ではなく、行いが伴っていくことの大切さを学んでいます。聖書は次のように教えています。

1 コリントの手紙 13章

- 13:1 たとい、私が人の異言や、御使いの異言で話しても、愛がないなら、やかましいどらや、うるさいシンバルと同じです。
- 13:2 また、たとい私が預言の賜物を持っており、またあらゆる奥義とあらゆる知識とに通じ、また、山を動かすほどの完全な信仰を持っていても、愛がないなら、何の値うちもありません。
- 13:3 また、たとい私が持っている物の全部を貧しい人たちに分け与え、また私のからだを焼かれるために渡しても、愛がなければ、何の役にも立ちません。

- ・皆さん。私たちは聖書全体を通して、神のお心を知る必要があります。信仰は大変大切ですが、信仰だけではありません。行いも大切ですが、行いだけでもありません。しかし、信仰と行いの全体に神の愛があって、はじめて本物なのだという事になります。ヤコブは「信仰も、もし行ないがなかったなら、それだけでは、死んだものです。」(2:17) と述べました。つまり、信仰と行いという両面を、聖書全体との関係から、正しくとらえていくことが重要なのです。
- ・それでは、具体的にどのように歩むべきでしょうか。

2. 信仰を实践すること

1) みことばを読むこと

- ・「ただ、聞くだけの者であってははいけません」(1:22) と聖書にありますが、実践は先ず聞くことから始まります。聞くことは大切です。しかし、聞くだけで終わってはならない、ということです。私たちにとって聞くことの第一は、聖書を読むことです。神がお語りくださる声を聞くことです。まずは、これを実践していきたくと思います。自分で聖書を読むことは、だれかが聖書を読むこととは違い、意義があります。
- ・しかし、聖書を読み通すことは、やさしいことではありません。厚い書物であるからです。これを読んでいくには、それなりの決意(意思)が必要です。しかも聖書は厚いだけではありません。分かりにくく、むつかしいところがたくさんあります。
- ・時間的にも、聖書の初めが書かれてから最後が書かれるまで、約1千数百年の時差があります。文化的にも日本とは大きく異なります。宗教的にも多神教の日本とは、異なります。当然、登場する人の思考も違います。つまり、私たちにとっては異なるものです。
- ・しかし、聖書は神からの書です。これらの壁を越えて、私たちの心に、生活に、生涯に、

励ましとなることばが沢山あります。

難しいからといって、厚い本だからといって、いつまでも聖書を机上に置いておくだけでは、一生、このすばらしいものを自分のものにはできません。皆さん。聖書のことばを無味乾燥に感じているような状態から早く卒業し、もうこれなしには私の生活に潤いはないと、思うほどにならせていただきたいものです。

- ・ところで、ここに「ミニ聖書」(3 cm×4 cm サイズのヨハネ福音書)があります。これはかつて、無神論社会時代(1970年代)のロシア・シベリヤの囚人へ、この「ミニ聖書」をパンの中に入れて焼き届けたものです。この1冊の福音書を通し、多くの囚人たちが励ましと力を得ました。聖書は神の書です。
- ・今の日本では、立派な聖書があります。読む意思さえあれば、いつでも読むことができます。しかし、読めるのに読めないのです。
- ・聖書を読まないことの一つは、聖書の価値を知らないことにあります。世の魅力、日々の忙しさ、やるべきことが他にあるなど……。私たちが聖書を読むことから、遠ざけてしまうのです。
- ・しかし、聖書のみことば、価値を理解するのに、助けてくれるものに、デイボーション・テキストがあります。テキストを有効的に用いることは、実に幸いです。私たちが用いているテキストは、聖書の学びを極めた牧師や聖書学者が、さまざまな角度から、みことばをやさしく説き明してくれます。それは本当に貴重なもので、聖書を読み理解する上で大変役立ちます。(皆さんがその他の愛用のデイボーション・テキストがあれば、どうぞそれを用いてください。)
- ・とにかく、聖書を読むことから祝福は始まります。また私たちの教会では、テキストの「分かち合い会」も開かれています。月2回の「分かち合い会」も大変祝されます。各自が学び教えられた点を、互いにシェアすることは、本当に有益です。いかがでしょうか。2019年、新しい年は先ず「みことばを読むこと」から始めようではありませんか。それは神の祝福を勝ち取る道であるからです。

2) 読んだみことばを実行すること

- ・聖書を読んでいきますと、正直いって途中で止めてしまいたくなるような、自分に都合の悪い心を刺すようなことばが出てきます。そのみことばに従うために、生活を変えなければならないこと、悔い改めなければならないこと、あるいは誰かにお詫びしなければならないこと等が、私たちに迫ってくる場合があります。
- ・じつはそこが大切です。ヘブル人への手紙4章12節
4:12 神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。
- ・皆さん。みことばを聞くだけにしてしまいませんか、あるいは実行するか、自分を変える一つの分疑点になります。いかがでしょうか。どうすれば良いでしょうか。解決は逃げることではありません。心を刺すようなみことばに突き当たったのなら、そこから逃げ

ないことです。すなおに自分の非を認めて、神様の前に出て、改ためていくことです。なぜなら、神が私たちにお語りくださっているからです。

- そのためには、勇気が必要です。お祈りすることです。

聖書は「みことばを実行する人になりなさい。ただ、聞くだけの者であってははいけません」(1:22)と教えています。皆さん！「行う」とは、誰か他人に対して行うことも大切ですが、先ず自分から「行う」ことが大切です。

- 自分の心、自分の生活、自分の生き方に信仰を実践することからです。

そして神様に対して、信仰を「行い」においても表す必要があります。神を信じますと言いながら、もしその生活や生涯が、神が期待されるようなものからかけ離れているとしたら、神はどんなに悲しまれることでしょうか。

- 私の生活、私の仕事、私の人生が、神様に喜んでいただけるものになりたいですね。その人こそ、みことばを実行する人です。弱者に対して、貧しい環境にある人に対して、また病む人に対して、みことばが「行い」という実践へ先導してくださいます。それは神様がなしてくださる「みわざ」であります。

感謝です。

- いかがでしょうか。今日の学びを通して、「信仰の実践が大切なのは分かるけれども、私にはできない。」「聖書がそういうことを要求しているのなら、私はとてもやっていけない。」、とがっかりする方もおられるかも知れません。

- しかし、心配しないでください。先ずできることから始めてください。はじめから、できる人は誰もいないのです。

- 私がどなたかのお祈りによって助けられたように、私も他の方のためにお祈りをさせていただきます。あなたの、信仰の行いが他の人を大いに助け、励ますこととなるのです。あなたの生活の中で、信仰を今より少し多く、実践することに移してください。

ま と め

主 題：「死んだ信仰とは」

- 私たちは今日、「死んだ信仰とは」と題して、神のみ声を聞きました。

信仰と行い、そしてそこに神の愛が加わってくださる時、信仰の実践が始まります。もう「死んだ信仰」ではありません。それはすばらしい信仰の歩みです。人に愛され、感謝される、喜びの人生です。

- では、信仰の実践を実践するには、何が大切でしょうか。

1. みことばを読むこと
2. 読んだみことばを実践すること

「みことばを実行する人になりなさい。

ただ、聞くだけの者であってははいけません」 (1:22)

* God bless you!